
あまえた

篠義

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あまえた

【Nコード】

N1242Q

【作者名】

篠義

【あらすじ】

関西夫夫

関西弁で、字書きはできるのか？ で、はじまった、このお話。

意味がわからない言葉があれば、連絡ください。ははははは。

少し涼しい夜だった。ふう、と、肩の力を抜くように息を吐いて、
だらだらと家路を辿る。あまりにも暑い日が続いたので、こういう
夜は有難い。ちょうど、半月ぐらいの丸い月が、山の上にあつて、
それが少し雲にかかっている。日中に、雨が降ったから、そのせい
でもあるのだろう。

もう歩いている人間のない道は、静かで、とても気持ちが良い。

・・・盆休みなかったから、そろそろ草臥れてるな、俺・・・

サービス業なので、盆休みというものは、基本的にはない。旦那
も、公務員だからないので、わざと、その時期に休みは取らないの
が、いつものことだ。だが、どうしても家族がある人間は墓参りだ
とかの用事があるから、何日かは休みを取る。いつもより、ちょっ
と忙しくなるので、大抵が残業だ。

この週末は、きつちりと休もうと思いつつ、歩いていたら、前か
ら足音がした。ふと、前方に顔を向けたら、気楽な格好の俺の旦那
がいた。

「おかえり。」

「なんや？ コンビニか？」

「いいや、ええ月夜やから、迎えがてらに散歩してたんや。」

「お疲れさん。」

「それは、俺の台詞ちゃうか？」

「そうか？ わざわざ、迎えに来てもらたんやから、俺が言うほうがええんちゃうか？」

二人して、距離を縮めて向かい合った。月夜だから、相手の顔が良く見える。風呂に入ったらしく、少し髪が濡れている、俺の旦那は、へらへらと笑っている。

「涼みがてらに散歩してただけや。礼を言われるほど、たいそうなこととちゃう。」

くるりと、旦那は向きを変えて、俺と並んで歩き出す。そうだったか、と、俺も同じように歩き出す。しばらくして、並んでいて触れた手が、ゆっくりと沿うように延ばされて、俺の手を掴まえて握りこんだ。

「おい。」

「ええやないか。これがしたかったから、迎えに来たんや。……お手手繋いで、みな、かえろーや。」

調子っぱずれの歌を歌い、花月は、ふらふらと、その手を振っている。ええ年して往来ですることじゃない、と、ツツコンだものの、俺も手を外すつもりはない。

とても良い月夜なので、ふたりで一緒に、それを感じるというのは、とても楽しいことだ。ついでにいえば、こういうことをしたがる時の花月は、甘えたい気分であるらしい。いくつになっても、甘

えたい気分というのはなくならない。いつもは、俺が甘えているが、たまに、花月も甘えなくなるらしい。身体を重ねるようなものではなくて、ちょっとした触れ合いをして、それが楽しいと思うような簡単な甘え方だ。

・・・涼しかったから、人肌が恋しくなるのかなあー・・・

ぶらぶらとハイツまで歩いて、前後になって階段を上った。その時も、手は繋がっていて、玄関を入ると手は離れた。

「おかえり。」

「ただいま。もう、ええんか？」

「とりあえず、メシの支度せなあかんからな。」

「さよか、えらい呆氣ない。」

「いや、メシ食ったら、ちょっとベタベタさせてもらう。ほんで、週末の予定なんてものを話し合おうやないか。」

「ああ、俺も、それ、考えとつたんよ。」

どこどかと廊下を進みつつ、俺は、ネクタイを外し、スーツを脱ぐ。それを花月が、ほいほいと取り上げている。

「涼しいところへでも行こか？　ほんで、たまには、ええメシでも食うぐらいでどうやる？」

「ええんちゃうか？」

居間に辿り着いた途端に、ズボンとワイシャツも脱いで、パンツ一丁で、どかりと居間に座り込む。ぼーっと一息ついたら、さすが、軽いものが食卓に用意されて行くのが見えた。

「そこで寛いでんと、メシをちゃっちゃと食べ。」

「はいはい・・・え？・・・うなぎ？」

「うん、うなぎやけど、茶漬けやからさ。冷たい緑茶をかけて、わさびで食べ。」

小ぶりのどんぶりの中身は、大葉と茗荷とうなぎが載っていた。そこに、わさびが、どかつとトッピングされて、ペットボトルの冷たいお茶をかけられる。さらさらと喉越しよく通っていくと、わさびが効いていて、さっぱりしていた。付け合せは、きゅうりともずくの酢の物で、これも、あんまり酸っぱくない。

さらさらと十分とかわらず、それを食べると、どんぶりを食卓に置いた。疲れているから軽いものだが、ちゃんと夏バテ用になっているのが、なんともいえない気遣いだ。

「じつそさん、おおきに。」

「そらよかった。」

食卓に、何気なく置いた俺の手に、俺の旦那は手を添わせる。どつやら、今日の甘え方は、手を繋ぎたいらしい。

「たまには、腕枕したるか？」

「それ、ええな。ひとつ、頼むわ。」

「けど、本格的なんは、明後日まで待つてくれ。」

「おう、待たしてもらうで。」

俺のする腕枕は、あまり本来の腕枕ではない。上手でないので、腕がしびれてしまうからだ。枕の下を通して、花月の頭は枕の上だ。それでも、それで満足ではあるらしく、花月は、ほっと息を吐く。女性のように柔らかい胸はないから硬いのだが、心音がはっきり聞こえて心地良い、と、言う。

たまに、甘えられるのは悪くない。お互いがお互いに寄り添える相手だから、一方通行ではない証拠だと思う。

「とりあえず、風呂入れ。そうでないと、汗臭くてかなわん。」

「……せやろな。俺、自分でも臭いもんな。」

あはははは……と、添わせていた手を離して、ふたりして立ち上がる。そろそろ涼しい夏の夜。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1242q/>

あまえた

2011年1月15日20時38分発行